

マレーシアに来て15週目、今日はクリスマスの為祝日となっており、大学や近所の食堂も休みになっている。実際モスクですらクリスマス用のイルミネーションで飾り付けられており、街行く多くの人が年齢に関わらずサンタの帽子やトナカイ、ツリーを模した帽子を被っている。このように世間はクリスマスモードなのだが、クリスマスに関しては先日記事にしたので代わりに今日はマレーシア人の服装について取り上げてみようと思う。

マレーシアでは多くの国民が洋服を着ている一方で、未だ伝統衣装も根強い人気がある。マレー系やインド系の人々の中には普段着として来ている人も多く、年配の方の方が割合としては高いが若い人も結構な人数が着ている。教室比率で言えば3割くらいだろうか。軽く彼らの伝統衣装について説明してみよう。

・マレー系伝統衣装：女性はbaju kurung, baju kebaya 男性はbatikと言い、袖が長く生地もしっかりとした丈夫なもので、光を通さない素材で作られている。彼らの伝統衣装は洋服と比べて快適とは言いつらい。袖が長く、生地は風を通さず、有体可言えば暑い。暑い、体全体を覆い隠す為に彼らの宗教には適している。要は肌を隠すのに便利なのだ。

・インド系伝統衣装：女性はsari,punjabi suit 男性がkurtaと言い、とても涼しい生地で作られている。半袖で風通しがよく、軽い、気候にあった実用的なデザインである。彼らは肌を隠す必要もないため開放的な雰囲気だ。

・中国系伝統衣装：女性はCheongsam (girls), 男性はSamfuと言い薄く滑らかな生地で作られている。体の線が浮き出るデザインになっており、とても華やかだ。彼らは普段は洋服を着て過ごしており、特別な日だけこの伝統衣装を着る。この辺は大体日本人と同じ感覚のようで、日本的に言えばケとハレの日を大事にしているようだ。

私が彼らを見ていて一つ面白いと思ったことは、いくら多民族国家であるとはいえ、自分と異なる人種の伝統衣装を着ることは珍しく、一般的ではないという事だ。彼らが伝統衣装を着る理由として、それに慣れ親しんでいるという以外に自己のアイデンティティを保つためというものがある。様々な人種が住んでいるマレーシアという国でお互いを受け入れるためには、自己を保つための柱となるものが必要となる。幾世代にも渡って引き継がれ、各生活様式や文化に根差してきた伝統はその性質故に各文化を色濃く反映しており、その中でも個人や所属を示すシンボルである服は正に自己を証明する為に最適なツールなのだ。このような理由から、未だに伝統衣装が好まれているのだろう。

自己の証明に伝統衣装を着るという考え方、つまりは伝統文化を用いるという考え方はとても興味深く、また国際化が進むにつれて日本でもその有効性をより実感として感じる人が増えていこうと感じている。

実際に先日のJAPAN DAYで日本の紹介に用いられたものは全て日本の伝統文化に関するものであり、その日私は伝統文化の重要性を再認識する事になった。

島国である日本では異文化に生で触れる機会が少ないため、自己と他文化について省みる機会も少なく日本人である事の証明の難しさ、その必要性に気付くことがない。しかし国際化が進めば、他文化との接触が増え、自分のアイデンティティに向き合う時が増えるだろう。その時、自己証明の有効な手段として、我々は伝統文化の重要性を再認識させられるだろう。我々は伝統文化の重要性とその価値を今一度見直すべきなのだ。今の自分と同世代の若者のうち、どれだけの人が自信を持って外国人に日本文化を紹介することが出来るのか、日本に帰ったら問いかけたい。小倉



マレーシアの伝統衣装batik.正式なパーティーにも来ていけるこちらの正装。